



Title	初期在仏アンナン語教育に関する資料の初歩的分析
Author(s)	松岡, 怜奈
Citation	EX ORIENTE. 2026, 30, p. 182-183
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104292
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

初期在仏アンナン語教育に関する資料の初歩的分析

松岡怜奈

19世紀半ば、植民地インドシナの支配開始に伴い、フランス人現地官吏に対してアンナン語（ベトナム語）教育を実施する必要性が生じた。1871年よりフランスでは東洋言語学校（École des langues orientales vivantes）でアンナン語教育が開始された。本発表では同校のカリキュラム、教科書、学年末試験など、初期在仏アンナン語教育に関する一次資料の初歩的な分析を行った。そして軍政末期におけるフランス本国と植民地インドシナの間を、アンナン語教育という観点から考察した。カリキュラムと教科書の分析からは以下5点が判明した。1）東洋言語学校のアンナン語講座では、初代教員のアベル・デ・ミシェル（Abel des Michels）が発行した教科書のほか、植民地インドシナで発行された教科書を使用した。2）キリスト教の内容を扱った教科書が用いられた一方、1876年以降は文語体で書かれたアンナンの文学作品である詩も教科書となった。3）1887年の仏領インドシナ連邦成立という植民地における情勢の変化が、フランス本国のアンナン語講座のカリキュラムに反映された。特に方言に関する内容が追加された。4）1888年植民地インドシナで通訳官を務めたジャン・ボネ（Jean Bonet）がフランス本国の東洋言語学校に赴任すると、植民地官吏向けの実務的な教科書が使用されるようになった。5）フランス本国のアベル・デ・ミシェルと、植民地インドシナの現地人知的エリートであるチュオン・ヴィン・キー（Truong Vinh Ky）は双方とも植民地でのアンナン語のニーズを考慮して教材を作成した。しかし、彼らの重視する点は対照的であった。アベル・デ・ミシェルは漢字・チュノムを重視したのに対し、チュオン・ヴィン・キーはクオックゲー（アンナン語のアルファベット表記）を

重視した。学年末試験の分析からは、以下3点の理解を得た。1) 筆記試験では、クオックゲーのみでなく、漢字・チュノムの表記を問う学年度もあった。2) 筆記試験のほか、口頭試験も実施する学年度があった。3) 植民地インドシナの予算でフランス本国に赴任したネイティブ講師も学年末試験に参加していた。以上より、アンナン語教育においては植民地インドシナからフランス本国に対して影響を与えていたことが分かり、軍政末期におけるフランス本国と植民地インドシナの関係の一端が明らかになったと考える。